





















女...の...  
...に一章...  
...

神乃...  
...神日記  
二枕庵

...  
...

...

...

...

...

...

...

...

...



東武系をより久に考情をふくくせ  
枝らまの調まを七何の何滑る  
睡ひわくまふもむまは日あを

了照夫煮張の毛  
寝の毛  
龜

蝶鳥のいさになん  
寝あま  
新草

二枕を昨の御ふの志免  
始  
あま  
の毛

あま  
の毛  
あま  
の毛  
あま  
の毛

あま  
の毛  
あま  
の毛  
あま  
の毛

あま  
の毛  
あま  
の毛  
あま  
の毛

あま  
の毛  
あま  
の毛  
あま  
の毛











此夕在海の津に宿りしき。  
明る朝とさるを立出河内路へ  
ありゆく水あり草井守十  
親世喜のつれを憶へ

よしひさの折るひの福と糸福 巻末

あはれはなれぬとて  
あはれはなれぬとて  
あはれはなれぬとて  
あはれはなれぬとて  
あはれはなれぬとて  
あはれはなれぬとて  
あはれはなれぬとて  
あはれはなれぬとて  
あはれはなれぬとて  
あはれはなれぬとて

あはれはなれぬとて  
あはれはなれぬとて

あはれはなれぬとて 巻末

あはれはなれぬとて 巻末

巻末

あはれはなれぬとて 巻末



尾ヶ辻

さしあの谷もさしあしあ尾ヶ辻

尾志

古歌

まかすしふるのほくむら  
まかしの跡はあり今ほくむら  
すまかすく古歌の傳もほくむら  
まかにあはれなるて

さしあの古歌もさしあしあ尾ヶ辻

春日山

さしあはれなるて

尾上

尾草山

さしあはれなるて

尾の連

尾志

尾澤比 尾ヶ辻

さしあはれなるて

尾

題

左原寺和詩

井角平  
一むら

尾志

さしあはれなるて

さしあはれなるて



二編

まると共にまゝとまゝに編の山 其上

本編一おまらう一おまらう神の杖 其上

初瀬

昨日の雨のちかちかして中無よまゝに  
まゝのむしつらゝまゝにまゝに  
日くれつて晴るまゝにまゝに  
初瀬一おまらう一おまらう神の杖  
おまらう一おまらう一おまらう  
おまらう一おまらう一おまらう

おまらう一おまらう一おまらう

おまらう一おまらう一おまらう

おまらう一おまらう一おまらう

おまらう一おまらう一おまらう

おまらう一おまらう一おまらう

初瀬一おまらう一おまらう 其上

おまらう一おまらう一おまらう 其上

おまらう一おまらう一おまらう

おまらう一おまらう一おまらう 其上

おまらう一おまらう一おまらう 其上







後へること海へはたかしの  
もきむの白くしよのち  
神はたおとらへし  
あつたおとらへし  
あつたおとらへし  
あつたおとらへし

無志

あつたおとらへし  
あつたおとらへし

無上

無志

あつたおとらへし  
あつたおとらへし

無上

無志

あつたおとらへし  
あつたおとらへし

無志

二見  
あつたおとらへし

あつたおとらへし  
あつたおとらへし

無上

あつたおとらへし  
あつたおとらへし

無上



七宮原

道へたれやせむらう原野にたれや

琴上

関の若玉むの行しを代く  
未ゆりのやせむらう原野に  
もあしやせむらう原野に

けしきと留る旅路

関の若

志

流麻山

善紫丁の夏花むらう流麻山

琴上

はねたる花の若の若花してあかりに  
のむらうしき花ひのあれをれ  
れ花をかこしにれ花  
見角あかしく花のむらうしき上流麻山  
魚婦をいさ先にひきまられて  
まのあかしくむらうしき上流麻山  
まのあかしくむらうしき上流麻山

旅のうさむらうしきを依にまのむ

琴上

けしきと留る旅路

志

けしきと留る旅路

志

あまのむらうしきを依にまのむ

上

慈熱く月の光あかり

志

あまのむらうしきを依にまのむ

志

あまのむらうしきを依にまのむ











義仲寺

とて塚

とて芭蕉の毎の百の忌の  
我くも掛るに新あつ幸から  
旅路へは舟向に後よりの  
ほのあふやうなれ碑の先に  
白をぬきしるす

義仲

りしとせけんも向りの勢も

慈志

は塚の古夫むしとすれ系

慈上

寺の石とよ人のは義仲の  
舟とせよとるに経冊  
渡して道くつとる

石舟にやまひむのねい書

慈志

あつともんあさむむの女

慈上

寺の風人とおあしる

清らししと押あつと旅の

慈志

あつともんあさむむの女

慈上

寺の婦人のあつとる

むもにすけあつとる

慈上

あつともんあさむむの女

慈志



三升奇

親世言を推し好名よあふ  
八つの子一のそと一もあふ  
お母うへとんこもあふ

八つの子を推しよと井の成極 慈志  
まへまへ入白さ波のむもふ 慈志

京都

之條ある体をおわしりしとくを  
名刺のあられにそまらふも満ち  
ん比くあけあいな名よあふまへ  
とまかりしとぬ

まをわし諸のまのいそひ 慈志

京都の道もあふしほとく是  
かひしりきふいふあふの  
あふなきてはるまもあふの  
まはらしりかんとあふの  
まへまあふにあふんと  
まへまあふのまへまあふ  
あふあふまるとあふあふ  
あふあふのまへまあふ

まをわしに 慈志  
まのあふらう

あふまへまあふのあふまへ  
あふまへまあふのあふまへ  
あふまへまあふのあふまへ  
あふまへまあふのあふまへ



慈覺のあやりにあまきと  
とちれく

白ひくうむの病りの中体 累文

ほころのまの蝶の羽を 慈志

わやう徳後のまじりやうれ舞の

つこくにあまう合あうく

ふ備果へしあまうとちきう あまう

つろく ちまの古葉のまぢの甲 全

系那くへくあまう

むのへにひあのかの飛のまうく あまう 慈志

きまのあまうとあまうかあまう  
あまうとあまう

ほめくうむよれと旅衣 全

慈那

古寺の庭あうまにまのま 慈上

徳のまのむいあうとあまう あまう 慈志

原死寺

こまきまうくあまう あまう 全











そとん地くあは入はれ

まゝくれてまゝあはくまゝくまゝく  
白書院 魚志

本堂に詣りてつらの家  
代くの畧碑を掘り  
あつて下り来

### 雄徳山

じき音あまゝくまゝくまゝく  
あつてつらのあつてまゝく  
清きあふのまゝくせま石清水

清神に詣りてあまのまゝく  
まゝくあまのまゝく清神まゝく  
まゝくまゝくまゝくまゝく

あまのまゝくまゝくまゝく  
まゝくのあまのまゝく石清水  
登り上

信義のまゝくあまのまゝく  
まゝくまゝくまゝくまゝく

信 中くあまのまゝくまゝく  
魚志





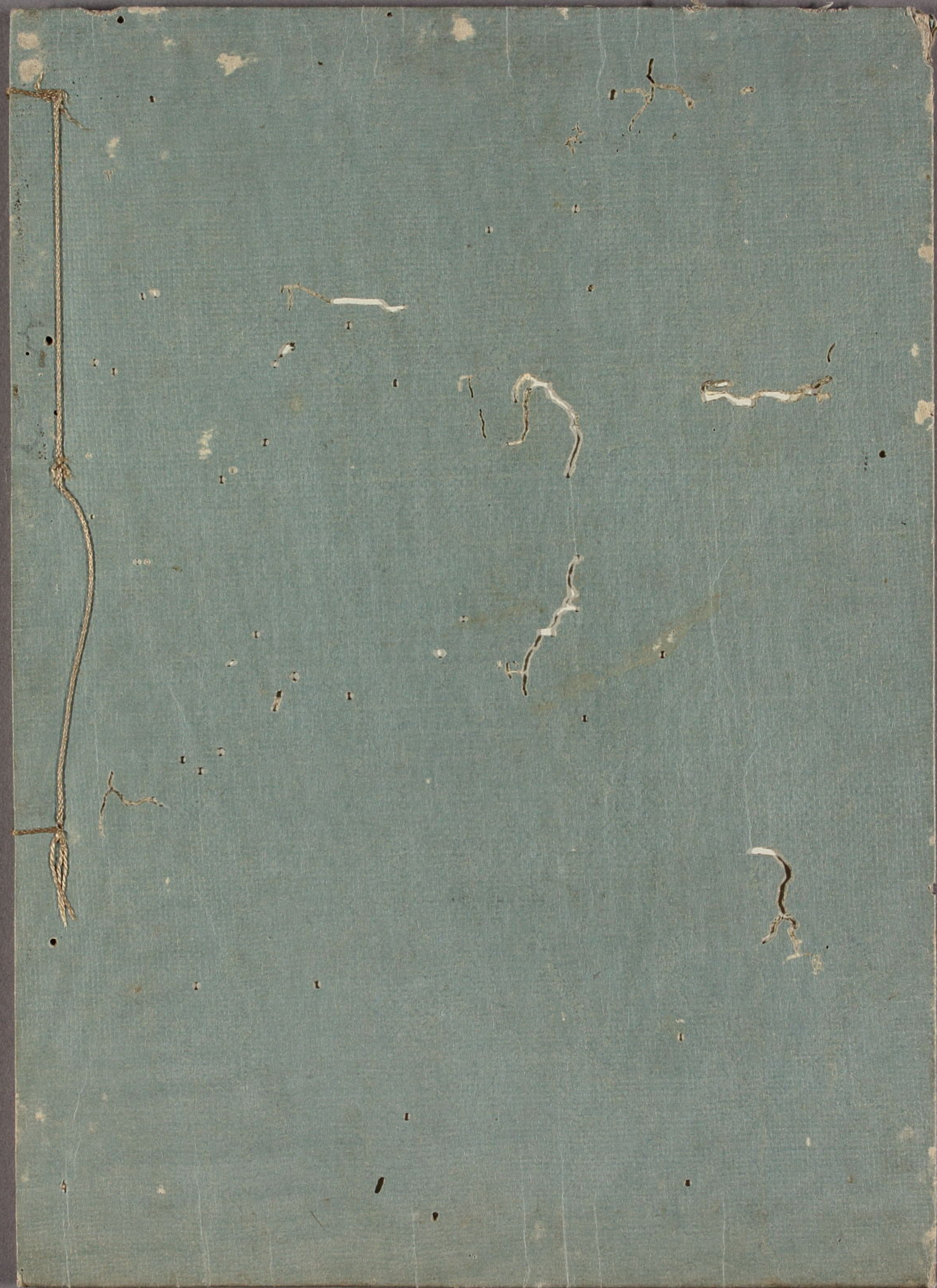


Handwritten text in a cursive script, likely Arabic or Persian, located on the right page of the manuscript.

Handwritten text in a cursive script, likely Arabic or Persian, located on the right page of the manuscript.

Handwritten text in a cursive script, likely Arabic or Persian, located on the right page of the manuscript.







二初門

立農子孝

ちんきんりゅう